

水害との対峙を読み解く 大津市上田上牧遺跡における近世集落跡の再検討

田 中 咲 子

1. はじめに

上田上牧遺跡は大津市上田上牧町に所在し、信楽谷を縦貫する大戸川の下流約20kmの沖積低地に位置する。（図1）

1994～1996年度に県営は場整備事業に伴い、県道大津信楽線の南東側に広がる水田地帯の12,517m²を対象とし、調査を実施した。発掘調査報告書は、調査年度ごとに刊行している。（滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会1998・2000）

近世以降、田上・上田上一帯は、大戸川の氾濫によって家屋の流出や水入り等の被害が頻発していた地域である。発掘調査報告書では、この状況について十分に言及することができなかつたため、本稿では、地元の方々による郷土史^(註1)や伝世している絵図をもとに、過去の発掘調査成果について再検討し、当地における水害の実態についての考察を試みた。

2. 歴史的環境

（1）集落の歴史

平安時代以降、田上・上田上一帯は荘園化され、牧庄・中庄・杣庄に区分された。上田上牧遺跡周辺は「牧庄」となる。しばしば有力寺院に寄進されたり、武士の支配を受けたりしている。近世になると「牧庄」は太閤検地により豊臣政権の五奉行の一人である浅野長政の知行地の一つとなり、徳川家康が政治の実権を握った後、慶長六年（1601年）には膳所藩領となる。

現在、上田上には大戸川の上流に上田上大鳥居町、草津川の上流に上田上桐生町があり、中流には上田上牧町・同平野町・同中野町・同芝原町・同堂町・同新免町があるが、それぞれの町域は、江戸時代の「村」があった頃とほぼ同じ範囲である。

村の大小は、その村でとれる米の石高（村高）で知ることができるとされているが、各村の石高は、寛永十一年（1634）の『近江国石高帳』では、大鳥居村二四五石六斗一升七合、桐生村二三一石六斗六升、牧村四五五石一斗一升、平野村四一二石一斗三升、中野村四六八石三斗、芝原村一七三石六斗二升、堂村二七〇石五斗九升五合、新免村一九四石四斗四升四合となっている。これによると稻作に適した大戸川中流域の広大肥沃な低地に耕地を多く持っていた、牧村・平野村・中野村の石高が比較的高いことが解る。やや時代が下るが、江戸幕府の命で天保年間（1831～1845）に作成された『天保郷帳』では、全国平均としてはおおよそ四〇〇石から五〇〇石となっているため^(註2)、この条件に当てはまる牧村は、全国的にみても標準的な稻作

を生業とする村であったようである。

（2）水害の歴史

大戸川は水流が常に絶えず、灌漑用水として田上周辺を潤していたが、その反面、花崗岩質で風化の激しい田上山地の土砂を大雨ごとに流出させ、沿岸地域にたびたび水害をひき起こしていた。天井化は貞享～元禄年間に進んだものと考えられ、これにより田上地区を中心とした地域では水害が相次いで起こった。『膳所藩領郡方日記』などに氾濫の記事がたびたび現れるようになる。

元禄年間（1688～1704頃）には、牧・平野では、大戸川の土砂流出のため、被害を受けた家々は順次高所に向けて現在地に移転している。牧町の八幡神宮に奉納されている宝永四年（1707）の木札には、「牧の集落は大戸川の土砂の流出が激しくなり、川に土砂が堆積し、田の排水が悪く稻が実らなくなり、家が浸水するようになったため元禄2年（1689）より特に浸水のひどい家が山手に屋敷を移した」という内容が記されている。

宝永三年（1706年）には、前年の水害によって中野村・牧村付近で大戸川の一部流路が変わり、中野村の田畠の一部が新川筋となったため、中野村には牧村字辻の田地二町三反が替地として与えられ、一方牧村は吉川筋の開墾を命じられることがあった。（その後、1711年に両村は農地の交換を願い出ている。）

水害予防のため、宝永四年（1707）には、牧・堂間の大戸川の河道の付け替え工事を行っている。人夫五〇〇余を出役させた大規模な工事であった。しかし、洪水は治まらず、宝永六年（1709年）には芝原村の堤防が二四九間にわたり決壊している。翌年には、牧村も木造り堤防が決壊している。

大戸川が最も荒れ狂ったのは、宝永五年（1708年）で、中野村・芝原村では、六八戸が流失し、死者三名の被害が出たため、山手の現在地に移転している。

また、牧村では享保八年（1723年）および安永二年（1773年）にも移住が行われた。

天明八年（1788年）に、牧村の鎮守である八幡神社が大風を受け移転したのを最後に、洪水に対する記録が途絶える。翌年に再建された社殿の棟札には、「そもそも八幡宮御境内は、元来、古郷乾方（北西の方向）在り候処…邑中追々屋敷替え致す故、当社里下に成り勿体無き段申し合い、因って御所替え志し發し候…」と記されている。

以上、牧村を中心とした水害の歴史を概観したが、大戸川による度重なる水害が大規模であったことや、被害に悩

まされた牧村・平野村・芝原村・中野村の四村の家々が、順次計画的に村内を低地から高所へ移動したことが解る。また、神社の移転の記録から、牧村は天明八年（1788）頃までには移転が完了したことが想定できる。

3. 絵図から見る江戸時代の牧村

牧町の真田家に、宝暦三年（1753年）に描かれた、『山林田畠荒之絵図』が伝わる。（図2）^(註3) 膳所藩に、洪水の被害を報告するために提出されたものである。この絵図により、江戸時代の牧村の様子を知ることができる。以下、その概略について記述する。

- ・絵図は、東の大鳥居村堺から西の平野村堺まで、当時の牧村全体を俯瞰して描いたものである。
- ・中央には大戸川（k）が描かれている。
- ・村の中には、家々が描かれている場所が2か所存在している。村内を横断する道（c）を堺にして、大戸川沿いの平野部に位置する「下牧（しもまき）」（a）と、山手側に位置する「上牧（かみまき）」（b）である。もともとあつた集落が「下牧」で、移転先の集落が「上牧」である。
- ・「下牧」（a）から北側に延びる道が二股に分かれた地点に八幡宮（e）が建てられている。八幡宮は、天明9年（1789年）に上牧に再建された村の氏神である。
- ・「下牧」（a）の北側には、「綾目堂」（j）の字名が記されている。現在の牧町にある阿弥陀如来（市指定）を安置する「アヤメ堂」は、もとはこの場所にあったものと推測される。
- ・「下牧」（a）を横断する道（g）の南西隅には、「大将軍」（i）と記されている。この「大将軍」は、今も現地に残る將軍塚古墳（図1-3）であると考えられる。現在は、農業神として祀られている。
- ・「下牧」（a）の東側に沿って延びる道沿いには、「山の神」（h）が記されている。「山の神」は、春になると山から里に出てきて農作業を見守り、秋の取入れが済むと山へ入って山仕事を見守る神である。（調査当時には、もうすでにこの場所で山の神をまつる行事は行われなくなっている）
- ・大戸川から繋がる「川新田畠（牧村）」（l）と記された場所は、宝永三年（1706）から牧村が開墾することになった、「古川新田畠」と地元で呼称されていた、大戸川の旧流路である。
- ・東端の大鳥居村堺にそって流れる川は「一ノセ川」（m）と記され、現在の田代川に当たると考えられる。
- ・周囲に描かれた山（n・o・p）は、近隣の村と共同で利用する立合山（入会山）である。

4. 調査地と過去の調査結果

（1）調査地と絵図との対比

絵図から読み取れた情報を、調査当時の位置図に当ては

めると、このようになる。（図3）

- ・県道大津信楽線の北側にはほぼ平行し、上田上牧町を東西に横断する旧道（c）が確認できる。
- ・「下牧」（a）から北側に延びる道（d）の一部が確認でき、その二股に分かれた部分に八幡宮（e）が建てられていたことが推定される。
- ・將軍塚古墳（i）の北側を通過し、「下牧」（a）を横断する道（g）を確認できることから、「下牧」の絵図に示された位置が推定できる。

（2）調査結果

各年度の近世の遺構についての調査結果を図3・写真1にまとめた。

【平成6年度の調査】

八幡宮があったと推定される地点（e）の南側にある調査区1からは、調査当時に機能していた用水路に平行する、18世紀以降の水田に伴うと考えられる旧水路を全長約120mにわたって検出している。

【平成7年度の調査】

現在の上田上牧町に比較的近い調査区2からは、18世紀中頃に埋没した溝を検出している。調査区3からは、江戸時代の遺構は検出していない。

上田上牧集落から延びる道路に隣接した調査区4からは、江戸時代前期の遺構を切り込む流路跡を検出している。この流路跡は、1/1,000の地形図から求めた微地形の低い部分にほぼ合致する。この低地は、平成6年度において調査している江戸時代中期の洪水による堆積が見られる箇所を経て上田上平野町の方向へ続く。絵図に描かれている大戸川よりはやや山手を走ることから、ある一時期の流れもしくは、出水時の水の通り道であったことが推定される。

【平成8年度の調査】

「下牧」（a）があったとされる範囲に一番近い調査区5からは、17世紀初頭頃～18世紀後半頃の集落に伴う遺構を検出している。集落があった頃の遺構面上には洪水砂が厚さ30cmで堆積し、その上から火葬墓がつくられていた。火葬簿がつくられた時期は、集落の最終時期とほぼ同時期であるため、家屋の廃棄後洪水砂に覆われ、墓域が形成されていったと考えられる。

また、上層の火葬墓群の上にさらに洪水砂が20cmの厚さで堆積し、その上面に両側を石で護岸した南北方向に延びる水路や耕作痕を検出した。火葬墓群もまた洪水砂に覆われ、後に水田化されていったようである。

調査区5の西側に近接した調査区6からは、17世紀～18世紀後半頃の集落に伴う遺構と、同時期の自然流路の一部を検出している。この調査区では、18世紀後半頃の溝から、「牧」と線刻された瓦片が出土している。（写真2）

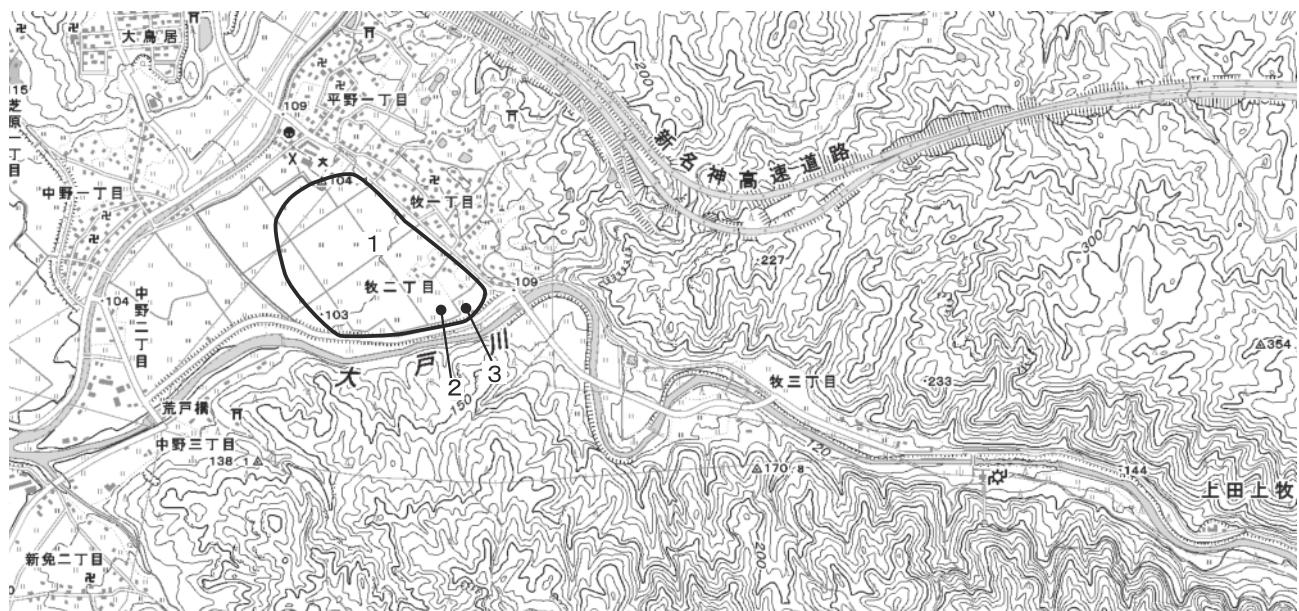


図1 調査地位置図 ($S=1/25,000$)
1. 上田上牧遺跡 2. 馬塚古墳 3. 將軍塚古墳

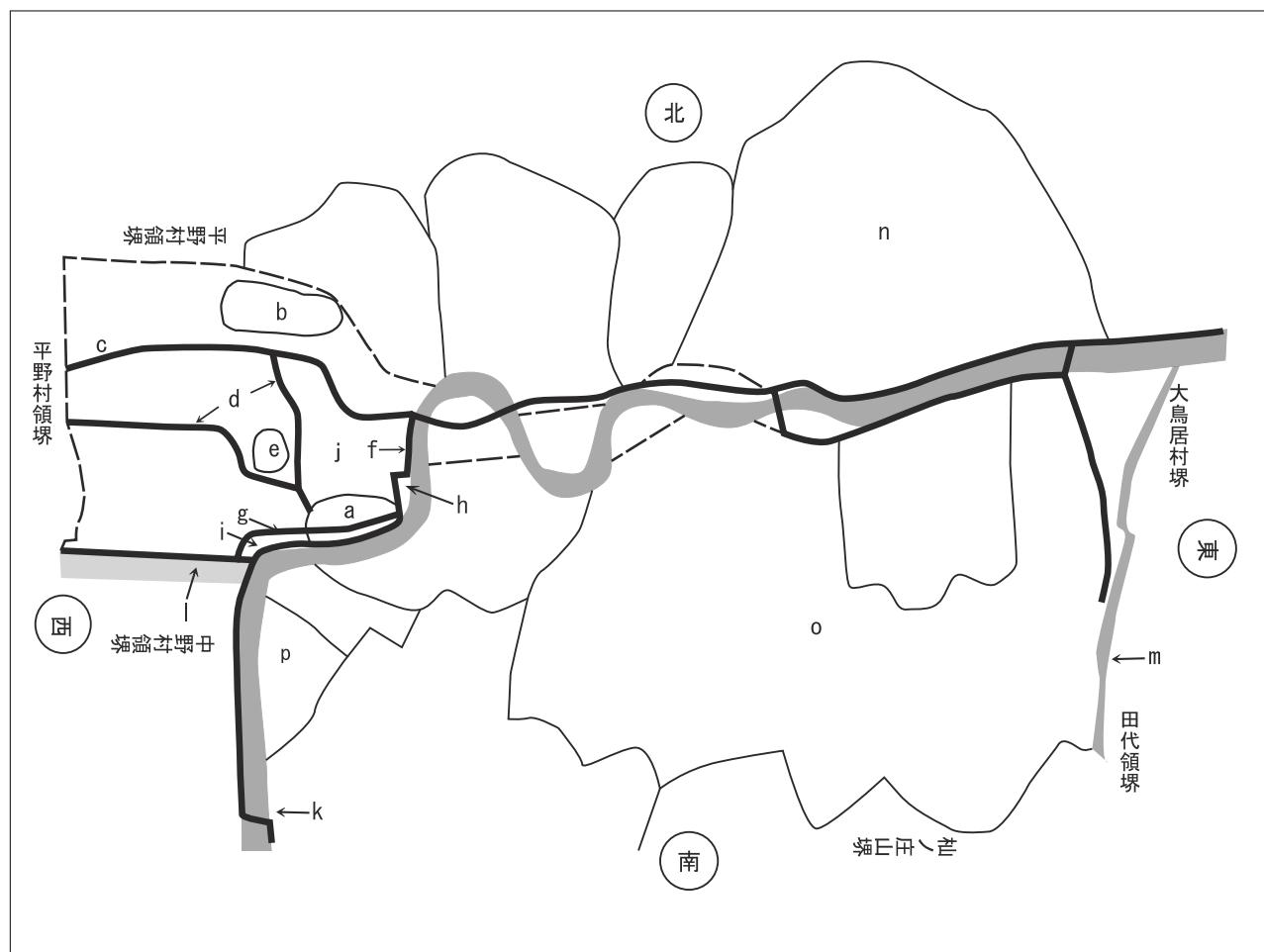


図2 『山林田畠荒之絵図』(1753年)



写真1 上田上牧遺跡遠景(北西より)



写真2 「牧」の線刻がある瓦片

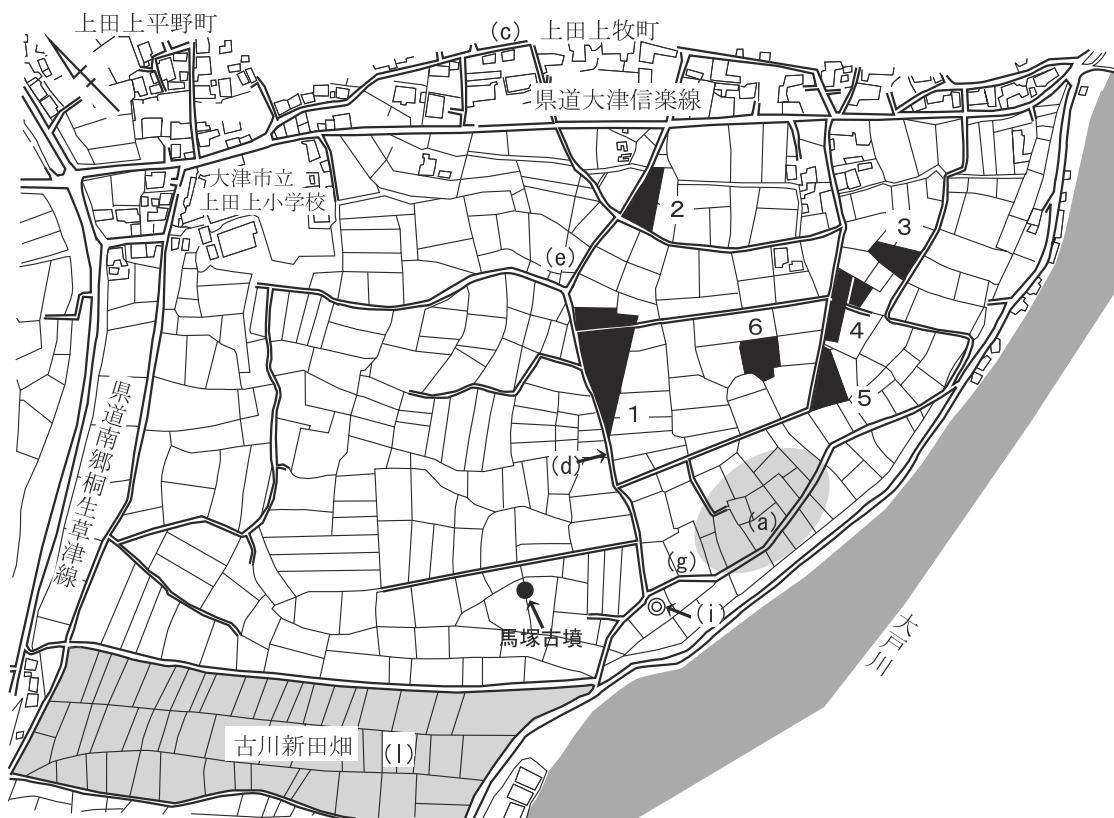


図3 調査区位置図(S=1/1,200)

(3) 小結

絵図より推定した範囲より外側に位置するが、平成8年度の2か所の調査区からは、17世紀～18世紀後半頃の遺構が検出されている。これらは、牧村の洪水の記録と合わせて考えると、元禄年間の最初の移住の時期から、1773年の最終移動の移住の時期までを含んでいる。このため、この2か所の調査区の遺構について時期別に抜き出し、検討を行うこととした。

5. 平成8年度発掘調査の再検討

洪水の時期と関係のない、17世紀代の遺構は除外した。その結果、18世紀前半頃と18世紀後半頃の遺構が抽出できた^{註4)}。

(1) 調査区5（図4）

東西37m・南北48mの調査区である。遺構面の標高は南端の一番低い部分で103.8m、北端の一番高い部分で104.5mを測り、地形は北から南にかけて緩やかに低くなっている。

上層の遺構であるS X 8の北側面と17世紀第の遺構であるS D 20の南側面を結んだラインの北側で30cmほどの段差がみられる。この段差は、遺構面を覆う洪水砂を除去した後に検出したものであり、旧状を示しているものと判断している。

【18世紀前半頃】

調査区の西端に、主軸方位をN-27°-Eにもつ区画溝S D 1がある。検出長30m・幅2.2～3.4m・深さ0.8～1.1mを測る。この溝は、洪水による砂礫で埋没した時期もあるが、掘削し直されて再度機能していた。

【18世紀後半頃】

調査区の南西端に主軸方向をほぼ南北方向にもつ礎石建物S B 1がある。東西5間（約4.7m）・南北2間（約2.8m）以上の礎石建物である。直径30cmの掘方に、直径20cmの河原石を配して礎石としている。

礎石建物S B 1の東側には、内径0.9～1.1m・深さ2.3mを測る石組井戸S E 1があり、北側には2連便槽の一部であると考えられるS K 1がある。S K 1の内部には、直径1.25mの木製桶を埋設している。S K 1とS B 1は、暗灰色砂質土により水平に整地された整地層の上面に造っている。

礎石建物S B 2は、遺構面が一段高くなった場所にある。東西5間（約6.5m）以上・南北2間（約2.6m）以上の主軸をN-16°-Eの方向にもつ礎石建物である。S B 2の北側には、S E 1とほぼ同規模の石組井戸S E 2がある。

(2) 調査区6（図5）

東西34m・南北40mの調査区である。遺構面には高低差はなく、標高は103.5mを測る。

【18世紀前半頃】（図5）

調査区の西側に区画溝S D 13がある。主軸をN-30°-E方向にもち、幅1.4～3.0m・深さ60cmを測る。北端は南北方向に屈曲すると考えられる。

調査区の南側には直径85cm・高さ64cmの木製桶を井戸枠としている井戸S E 1がある。調査区の北東側には、井戸枠が抜き取られた井戸S E 2がある。

区画溝S D 13の北側と井戸S E 2の北半分は、18世紀後半頃の自然流路S R 1によって削平を受けていた。

【18世紀後半頃】

調査区の西端に沿って、溝S D 1・S D 2・S D 9がある。これらの溝は、S D 1→S D 2→S D 9の順に掘削されているが、同じ場所と方向を意識して掘削している。S D 9は、主軸方向をN-34°-Eの方向にもち、幅50～80cm・深さ50cmを測る。

木製桶を埋設した2連便槽は、S K-1-S K 2・S K 53-S K 54・S K 59-S K 60の3基があり、主軸方向を溝S D 9と同じ方向あるいは直行する方向にもつ。

調査区の南西側に石組井戸S E 3があり、北東側に石組井戸S E 4がある。

調査区の東側に自然流路S R 1がある。最大幅8.0m・深さ1.0～1.8mを測る。地形から考えて、東側から西側にかけて流れていたと考えられる。石組井戸S E 4の上面をその流れによって削り取っているが、だんだん浅くなり、流路としての機能を失い埋没したのちに、2連便槽S K 1-S K 2が造られた。

調査区の西南側に東西4間（5.7m）以上・南北2間（3.5m）以上に延びると考えられる礎石建物S B 1がある。S B 1は、主軸方向をN-16°-Eの方向にもつ。

(3) 小結

18世紀前半頃は、概ね牧村の第一次の移転および第二次移転の時期にあたるが、今回検討した調査区5と調査区6

では、それ以降も生活の痕跡がみられるので、この辺りに住んでいた人達は18世紀後半の第三次移転の頃までこの地に留まっていたことがわかった。（表1）

18世紀前半頃と後半頃では、人々の生活に変化が見られた。屋敷を区画する溝や建物などの主軸方向は、18世紀後半のある時期までは、中世以来のN-27～35°-Eの方位を取るが、礎石建物が建てられる頃になると、北かやや北を意識した方位に変化している。井戸は、18世紀前半頃には井戸枠に木製桶を使用しているが、18世紀後半頃には石組井戸を使用するようになる。トイレ遺構である2連便槽は、18世紀後半頃から使用されるようになる。

また、調査区6では、自然流路が屋敷地を削り取るということがあったにも関わらず、その流路が更なる洪水で埋没した後に、再び屋敷地を造りなおしていた状況が確認できた。集落の中を流路が通過するという状況は、洪水によ

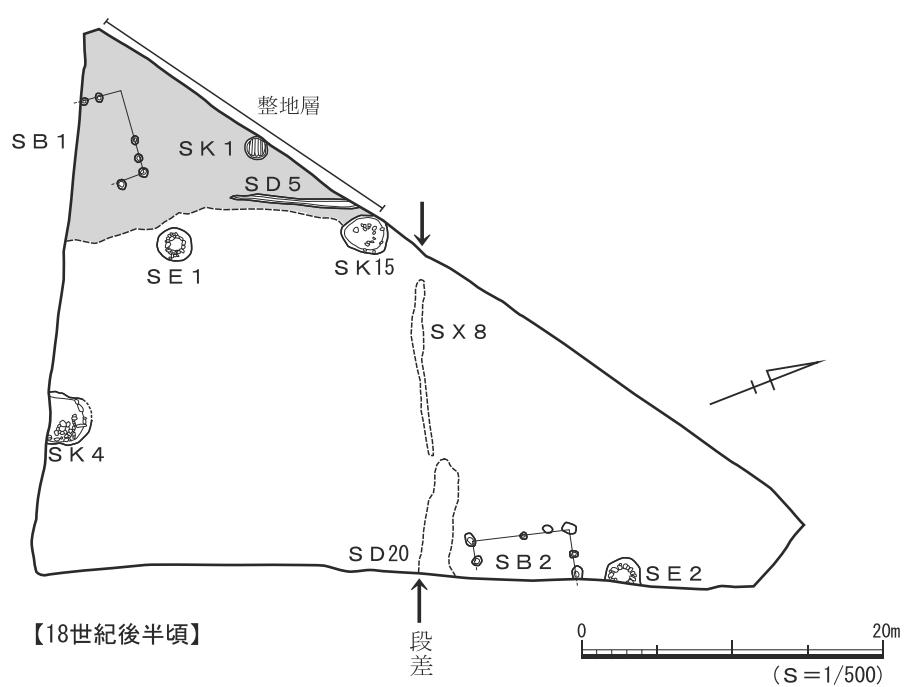
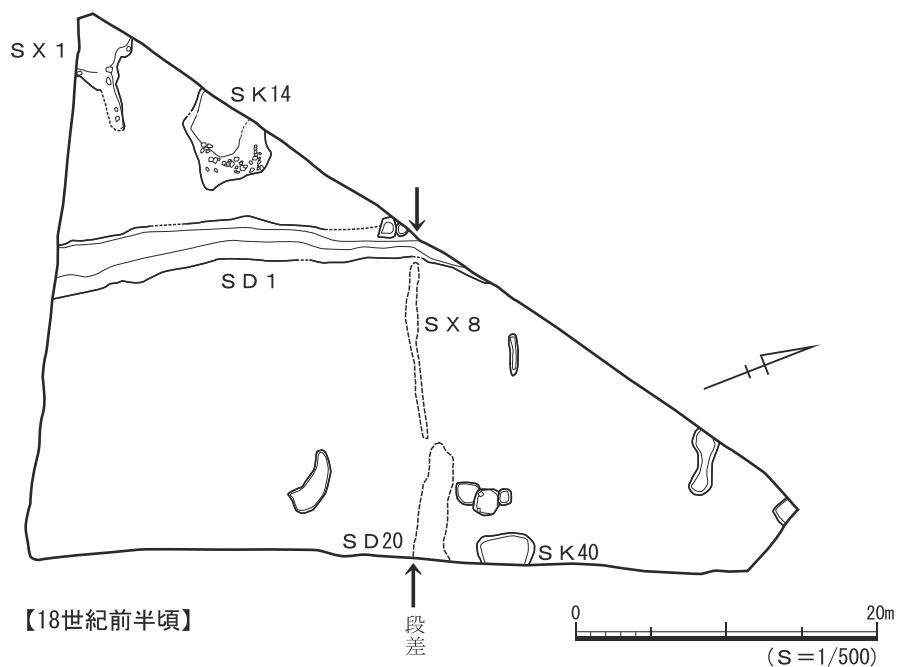


図4 調査区5主要遺構平面図

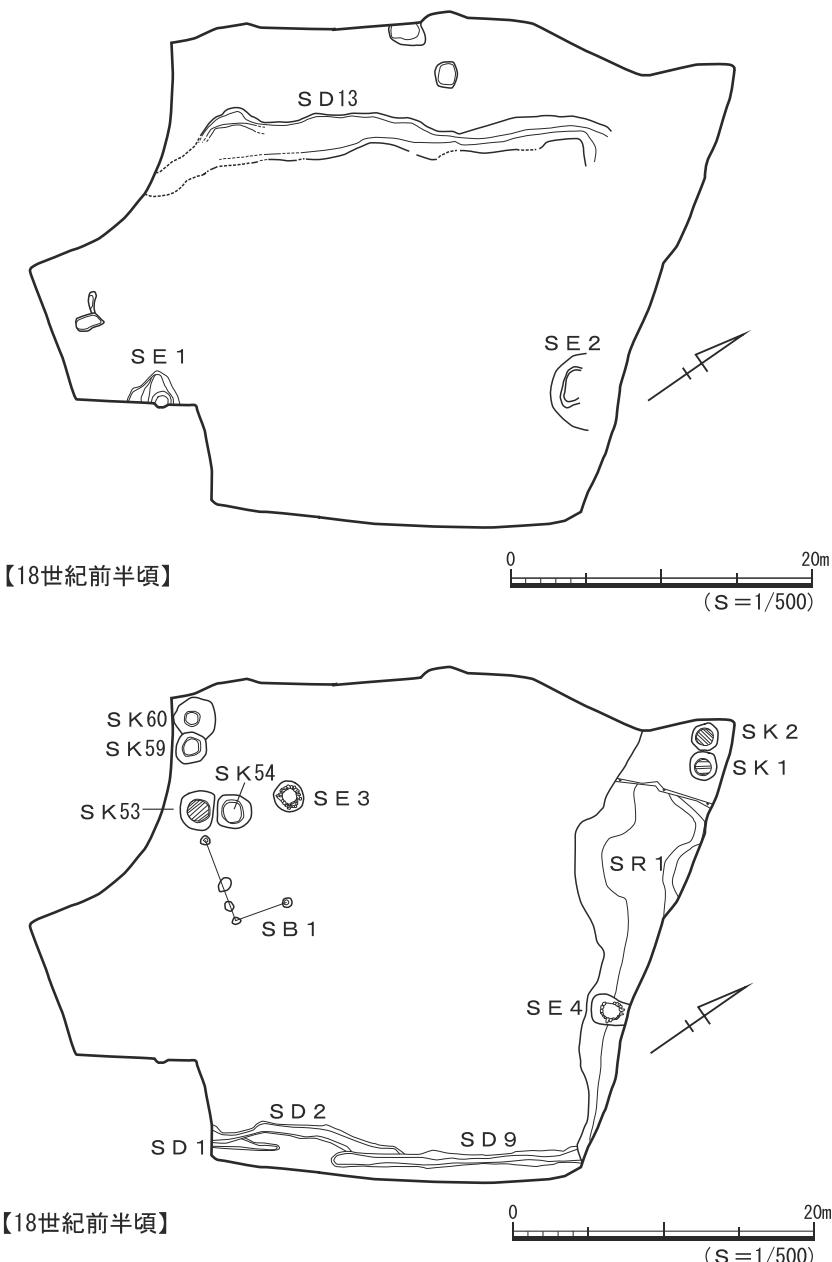


図5 調査区6 主要遺構図

表1 牧村移転の歴史

年代	事項
1688～1704年(元禄年間)	牧村の第一次移転
1723年(享保八年)	牧村の第二次移転
1753年(宝暦四年)	山林田畠荒之絵図が作成される
1773年(安永二年)	牧村の三次移転
1788年(天明八年)	八幡神社が大風による被害を受ける(翌年、山手側に再建)

る大規模な被害を現わしていると言える。

6. おわりに

上田上牧町にある真光寺の創始は元享元年（1321）であり、当初は現在の地より約5百メートルの大戸川によりあったそうである。大戸川の洪水により安永二年（1773）年に現在の地に移転している^(註5)。現存する過去帳には、正徳年間（1771～）以後の法名しか見あたらないため、それまでのものは洪水により流出してしまったようであり、当時の洪水の激しさを物語る。

宝永五年～明和八年（1708～1772）の64年間に牧村・平野村・中野村・芝原村において大水害が17回発生している。

村人は河川の付け替えや堤防の修復などの大規模な土木工事に駆り出されたり、水害で荒れ果てた耕地を復旧したり、水没した家の片づけを行ったりといった労役に日々相当な努力を強いられていた。

集落の移動を余儀なくされた集落は、低地側にあった牧村・平野村・中野村の3村である。平野村・中野村は、宝永5年（1708）までに移住が完了している。牧村のみ、元禄年間（1688～1704頃）、享保八年（1723）、安永二年（1773）の三度に分けて移住をしているのは何故だろうか。

経済的な理由で家引き作業をためらっていた家もあったと考えられるが、牧村の人達の中には先祖代々暮らした「下牧」に愛着があり、離れるなどを望まなかつた人達がいたのであろうか。現在真光寺がある場所は、字恋ノ山（コイのヤマ）といい、古老の話によると、「あの山のふもとで暮らしたい」と願ったところからつけられたという説がある^(註6)。

発掘調査では、記録のとおり18世紀後半頃に集落が廃棄されたことが確認できたが、最終的な移転の理由は記録に残っていないため不明である。しかし、度重なる洪水を受け入れながら、たくましく牧村に生きていた人たちの力強さをうかがい知ることができた。

〔謝辞〕

本稿を成すにあたり、絵図の写しをお借りした真光寺のご住職、周辺の民家の様子を知るために自宅を見学させてくださった作業員の皆様（当時）、出土土器についてのご指導をいただきました秋田裕穂氏・稻垣正宏氏、調査でお世話になりました清水ひかる氏・岩橋隆浩氏に、たいへん遅くなってしましましたが厚くお礼申し上げます。

註

- (1) 上田上学区シニア連合会（1993）『創立25周年記念誌 我がふる里』
- 上田上村誕生百周年記念実行委員会（1990）『上田上の生活体験談集成』
- (2) 木村 磯（1998）『村を歩く—日本史フィールド・ノート』

(3) 上田上牧町の真田家に伝わるもので、同町の真光寺にその写しが保管されている。

(4) 調査区5は平成8年度調査分のT6に対応し、調査区6は平成8年度調査分のT7に対応する。遺構番号は、発掘調査報告のものをそのまま使用している。

(5) 田上郷土資料館運営委員会（1975）『館報3 田上の寺院』

(6) (5) に同じ

挿図・写真典拠

図2 牧町真光寺に保管されていた、真田家に残る絵図の複写に拠る

図3 『上田上牧遺跡II』（1998）（図3）を改変。現在の地形は場整備事業による工事のため当時のものとは異なる。また、ここで呼称する調査区も、論をすすめるために整理しているため、発掘調査報告書のものと異なる。

写真1・2 『上田上牧遺跡III』（2000）に拠る

文献（著者名・機関名50音順、刊行年順）

- 秋田裕穂（2010）『ものと人間の文化史150 井戸』法政大学出版局
 石川慎治（2017）『近江の古民家—素材・意匠』サンライズ出版
 大岡敏明（2017）『江戸時代の家』水曜社
 大津市役所（1980）『新修大津市史3 近世前期』
 大津市役所（1986）『新修大津市史9 南部地域』
 黒崎直（2009）『水洗トイレは古代にもあった—トイレ考古学入門—』吉川弘文館
 九州近世陶磁学会（2000）『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会10周年記念—』
 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（1998）『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書XXV-1 上田上牧遺跡I』
 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（1998）『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書XXV-4 上田上牧遺跡II』
 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（2000）『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書27-7 上田上牧遺跡III』
 箱崎和久（2001）『文献にみる近世信濃の民家』『埋もれた中近世の住まい』同成社
 畑中英二（2003）『信楽焼の考古学的研究』サンライズ出版
 畑中英二（2007）『続・信楽焼の考古学的研究』サンライズ出版
 ふる里・田上を考える会（2003）『ふる里・田上再発見 1号』
 森隆（1996）『江尻遺跡の近代屋敷跡について』『埋蔵文化財調査概要—平成7年度—』財団法人富山県文化振興財団・埋蔵文化財調査事務所
 水本那彦（2015）『岩波新書1523 シリーズ日本近世史② 村—百姓たちの近世』
 山田安彦（1994）『方位と風土』古今書院

（たなか さきこ：調査課 副主幹）

平成31年（2019）3月31日

紀要 第32号

編集・発行：公益財団法人滋賀県文化財保護協会

520-2122 滋賀県大津市瀬田南大萱町1732-2

(TEL)077-548-9780／(FAX)077-543-1525

e-mail : mail@shiga-bunkazai.jp

<http://www.shiga-bunkazai.jp/>

印刷・製本：(株) 印刷 同朋舎